

アジアを 読む

4

「熱意と善意」 香港華人企業家の心意気

性格も太っ腹で、邦銀を中心とする国際金融機関と数億ドルの協調融資契約に調印した直後に、これで日本の銀行は我が社を潰せなくなつた」と真顔であいつ。居並ぶ邦銀の面々が苦笑する一幕もあった。

数年の苦境を脱して合和美業の経営に明かりがさし込み、ゴードン・ウー氏のアーキテクチャーとしての本能がうずき始めたようである。大橋の建設をめくつては、李嘉誠氏、マカオのカジノ王である信徳集團のスタンレー・ホー

(何鴻燊)氏、新鴻基地産の郭フアミリー、商社のリー&フン(利豐)などの参加を期待する声も出ている。

香港とマカオ・珠海を結ぶ大橋の建設には経済性という大きな問題が横たわっているが、広東省との経済連携を強めるためには有効なプロジェクトだろう。何よりも多士済々な有力財界人がその是非を巡つて活発に議論を交わすこと自体、香港の活力が衰えていないことを示すことにもなる。

李嘉誠氏とその傘下のハチソン・ワンポアグループがシンガポール経営大学に1950万シンガポールドル、約13億4000万円を寄付したことも、香港の華人企業家の存在感を示す話題である。シンガポールの研究学術機関への寄付としては過去最大という。

李嘉誠氏は年間1億香港ドルを香港、中国の教育、医療機関などに寄付し続けている慈善家としての横顔を併せ持つ。生まれ故郷に近い広東省の汕頭大学の建設資金を寄付したことは広く知られている。

91年末に李嘉誠氏にインタビューしたが、次の一節だけは強く印象に残っている。私の知識は大海に漂う一粒の米のようなものだ。少年時代に戦争の混乱を体験したせい、知識の大切さはよく分かる。生まれたからには社会に貢献したい。

大学など教育機関への寄付は、李氏がビジネスで成功し続けていることのおかげでもある。なぜ先進国並みの国民所得を持つシンガポールに寄付をする必要があるのかとの指摘もあるようだが、大学への寄付は次世代の香港とシンガポールとのネットワークづくりに大きく貢献することになる。

シンガポールといえば戦前に廈門大学に私財を提供したタン・カー・キ、陳嘉庚(タイガバム)、万金油の利益の25%を寄付したアウ・フンハウ(胡文虎)が有名である。その華人慈善家の大先輩が活躍したシンガポールで、香港の華人企業家が教育機関に多額の寄付をする。華人社会の妙なる糸を感じないだろうか。

(日経香港社社長 奥村幸広)

最近、香港の新聞報道をみながら懐かしさを感じた。香港とマカオ・珠海をつなぐ大橋の建設計画をめぐる論争と香港財界の大立者、李嘉誠氏がシンガポールに多額の寄付をしたという話題である。

大橋建設計画をめぐる論争の主役は推進を主張する合和美業(合和美業)会長のゴードン・ウー(胡心湘)氏と慎重派のハチソン・ワンポア社長のカニング・フォックス・霍建寧氏。懐かしく思ったのは、熱心な大橋の必要性を説くゴードン・ウー氏のことである。マン・ソミが絶頂期のころの彼につけた尊称は、投資大王だった。

80年代から中国での火力発電所や広州・深圳高速道路など大型インフラプロジェクトを次々と手がけ、特に広東省の

産業基盤づくりに大いに貢献したしかし、過大な借入金や海外プロジェクトのつまずき、さらにはアジア通貨危機などによつて90年代後半には大きな痛手を受けた。

90年前後に何度も取材をしたが、私は経営者ではない。アーキテクチャーである。建築物というモノ・コメントづくりが最大の趣味だ」といふこの人らしいことばを今でも覚えていいる。

父親は、タクシー大王と呼ばれた実業家。米プリンストン大学で土木工学を専攻、合和美業を69年に設立した。民間資本がインフラ施設の建設から一定期間の運営までを手がけるBOTという新方式を、中国に初めて持ち込んだのも彼の功績の一つである。